

# 滞韓日誌（六）

長沢雅春

2014年4月16日、韓国全羅南道の珍島沖合で、済州島への修学旅行のため乗船した339名の檀園高等学校生を含む476名を乗せた大型旅客船セウォル号が沈没して300名近い乗客が溺死した。詳細は新聞・テレビ・ネットなどで逐次報道されていて日本でもたいへん関心が高いが、この事故の顛末やその後も連続するソウル地下鉄での衝突事故や建物の崩落、政府の対応などを含めて、いま韓国のメディアの論調と国民意識は「わが国はまだ後進国だった」という、これまでの韓流の勢いに乗じた自信感の喪失へと向かっている。それを受けていま韓国では、自国の急激な現代産業化による弊害についてようやく検証を始めた。これが持続するものなのか、それとも韓国特有に時が経てば瞬く間に風化してしまうもののかはまだわからないが、しかし歴史を遡って自画像の検証に向かったということは私としてはたいへん興味深い現象である。

それで、久しぶりに以前本誌に掲載していた「滞韓国日

誌」のまだ活字にしていない部分を読み返してみた。私が住んだ1995年春〜1998年春当時の韓国を自分はどう覗いていたのだろうか、その見方は正しかったのだろうか、と。私自身の当時の自画像を検証するためにも、ほんとうに久しぶりで、かつたいへん恥ずかしいものだが「滞韓日誌（六）」として当時記しておいた1995年6月の日誌を活字にすることにした。

六月十四日（水）晴

このところ、西洋史の李光周教授とよく話す機会がある。今日も西洋史の李光周先生から研究室に遊びに来てくださるとの伝言をもらったので、試験一時間前を利用してさっ



そく研究室にお邪魔することにした。そして日本へ一時帰国するための格安チケットの旅行社を紹介してもらい、中国旅行で買ってきたという中国茶を御馳走になりながらもやま話に花を咲かせた。ちょうど日本では渡辺美智雄が「日韓併合は韓国との合意によつてなされた」との発言があつたばかりのときである。僕の担当するクラスでも「日本語は嫌い」と女子学生が言い出したり、全先生のクラスでも「日本語を勉強するのが嫌になつた」という学生が出て来て僕としてもやるせない気持ちに陥つていたときだ。

李光周先生は植民地時代に京城帝国大学に学び、その後は講演などでもたびたび日本を訪れたり、日本人の友人も多いということでも本人曰く、「わたしはかなり日本が好きです」と真顔で言ってくれる。しかしその氏をもつてしても、「今回の内閣の戦後表明は、日本が韓国に良心をみせてくれる絶好のチャンスを逸してしまつたと思ひます。残念です」と嘆く。「日本人はともいゝ国民なのに、あまりにも政治はお粗末すぎる」と。この「絶好のチャンス」という言葉には事情があつて、今年1月の神戸震災では多くの在日が死んだ。神戸には多くの在日が住み、死ななかつたにせよ現在でも困窮した生活を余儀なくされている。在日は北朝鮮系が圧倒的なため韓国でも差別的な存在になつてゐるわけだが、そのかれらに韓国人が同胞として憐れみ、日本人と朝鮮人が助け合つて生活しているという報道が韓国でもなされて、韓国では親日気分があつた渡辺発言以前ま

で存在していたのである。

そうした事情を外務省や政治家はまったく知らずにか渡辺発言をもたらし、自民党と官僚に支配された村山内閣はきわめて曖昧なあの決議を行ったのである。細川政権のときの細川発言を大きく後退した内容なのだ。千載一遇のチャンスを日本はみずから放棄したと普通の感覚をもっていれば認識できるはずである。外務省のアンテナは太平洋の彼方を向いていて、日本海方面には一本たりとも向いていないのだろうか。

そして、これから経済の朴ソプ先生と会うことになつてゐることを伝えると、「私も朴先生とはいろいろ話がつたので、じゃあ三人で夕食をしよう」ということになつて、いったん李先生の研究室を出ることにした。

午後、試験の合間をぬつて経済の朴先生の研究室に、先日いただいたテレビのお礼を言いに行くと、日本語をいま勉強中しているという法学の鄭泰綸先生を呼んで紹介される。歳は三十代後半から四十代前半くらい。毎朝日本語のテープを聴いて日本語を勉強しているという。だからお互いが外国語の初心者ということで、朴先生が「長沢先生、韓国語で話してみたらどうですか」という。そのときちょうど朴先生が「最近知つたんですが、『源氏物語』は世界最初の小説だそうですね」といつて『源氏物語』を話題にしたので、「それは知りませんでしたけど」と言つて簡単に韓国語で話してみた。僕の韓国語の勉強はこのところ翻

訳作業ばかりなので会話の勉強はしていない。だけど文法や漢字語の読み方は自然に覚えてきたので漢語を多用してみた。「ソルラゴヌン・インガンチュンシンチョグロ・ソヤングアンニョン・インニダ」(小説とは人間中心的な西洋概念です)。「ゲンジモノガタリヌン・ソヤンチョククンデソルラゴ・ハルスイツスンミダ」(源氏物語は西洋的近代の小説ということができません)。「クゴスン、イーイェギガ・コヌイチャン・インガンセゲエソソリニカインニダ」(それは、この物語が苦悩に満ちた人間世界小説だからです)。「長沢先生、韓国語が話せるんですね、私はまだ話せないと思っていました」と朴先生が言う。「意味が通じていましたか？」と僕が照れながら言う、「十分に通じていました」と朴先生。「翻訳しているだけでもなんとか話せるようになるもんですね」と僕。「これから二人で教え合つたらいいんじゃないですか」朴先生がというと、鄭先生は「二人が日本語で話しているのを聞いているだけで私の勉強になります」(通訳)と言って笑った。そして、今度一緒に食事をしましょう、と鄭先生がいうので、「パンガップスンミダ」と答えて試験教室へと僕は退室することにした。

夕方、約束していた西洋史の李先生と経済の朴先生と河豚鍋の夕食をする。食事をしながら韓国の近代化を阻む一般的な国民性の話を聞いた。それをかいつまんで説明すれば次のようになる。

韓国では中小の商店あるいは中小の企業がなかなか育たないらしい。それは、李氏朝鮮時代に植え付けられた儒教倫理があまりにも国民を拘束していて、いまでもそこから脱却できないところに歴史的要因があるという。あの「士農工商」という身分制度が、1990年代半ばの韓国では現実的なイデオロギーとして国民意識の中で健在だということである。すなわち、「士」(知識人)が最上階級で「商」がもつとも卑しい階級なのである。

では、このイデオロギーいまでもが国民の意識に支配概念として君臨しているとなるとどういう現象が起きるか。商店主は自分の職業は卑しいものだと言っているのに植え付けられながら商売をしているので、商売が成功するやいなやその店を高い金で売り渡してしまう。商売は信用で成り立っているわけだから、主が変われば信用もあらたに築かなくてはならず、引き継がれたその店はやがて消滅してしまう。また、商店主は子供の大学進学に大金を惜しまない。たとえどれほど店が成功しようとも、子供が有名大学に入學すれば未練なく店をたたくでしまう。「商」は「士」に成り上がりたいのであり、「商」という職業から脱却したいのである。それを愚かといつてはならないのだから。かれらは周囲から「卑しい職業」として見られていからである。そのため、少々でも成功した商店主はみずから社長と呼ぶか、呼ばせるのだそうだ。「社長」とは「士」階級に属するという苦し紛れの解釈かららしい。この、国民を挙げ

ての「土農工商」イデオロギーが、個人商売の成長を阻んでいる要因となっている。「日本ではたとえ大企業の社長でさえ、自分を商人だと信じていますよね」と李先生がいう。「日本人でも個人差というものはありますが、サントリーを代表とした大阪商人や西武などの近江商人はそういう意識が強いようですね。けちが美德と考えている大企業のオーナーも少なくないようですから」と答えた。

だから韓国では起業家は育たないし、ヤオハンやアスキー、ダイエーやジャストシステムなどといった成功話は残念ながら、ないそうだ。全国民が「土」を目指している。実際、僕が以前変圧器を購入した店に、国文学の朴先生が僕と同じものを購入しようとその店に行ってみると、その店は商売が成功したので店を閉めてしまっってもうなかった、とがっかりしていたことがある。

そして、「土」とはさきに知識階級といったが、つまり大学教授・医者・弁護士・国家公務員・大企業サラリーマンを意味する。大学進学率は日本を抜いて世界第二位というのも驚異的だが、それは上記のような事情による。だから中小の企業も育たない。みな嫌がっているからだ。したがって三星・現代・ロッテ・大宇といった限られた大企業が、比喩でいえば爪楊枝からロケットまでを生産し、すべての産業を支配していることになる。たとえば、いま僕が食べているアイスクリームは三星であり、エアメールの便箋も三星、コップも三星、国道を作っているのも三星、以前研

究室にやってきたおばちゃんも三星生命で学科室にあるコンピュータも三星、といった具合になっていて分業が成立していない。

たぶん北朝鮮に出す溶水炉も三星だろうと思う。もちろん、三星以外の大企業もそれに似たり寄ったりだ。出世を目指す上心？　これが遍く国民の心理を支配しており、そのためますます大企業は肥大化し、中小はみずからを切り捨て、皮相的な歪んだ産業システムが揺らぐことはない。それはひとえに伝統的な儒教倫理社会が生み出した構造だと李先生はいう。さらに儒教の教えが貞淑な女性を生み出したとよくいわれるが、事実はそうではなく、徹底した男尊女卑の社会が伝統的に形成されている（韓国政府刊行書によればそれは「男尊女卑の觀念に基づくものではなく、男女有別の思想に根ざす社会的分業の効率化を徹底させた結果であり、画一的な男女平等よりもある面ではきわめて、合理的な社会制度だったと評価される」と記されているが）ようだ。実際、女性の社会的地位はかなりこの韓国社会では低いようで、ステイタスある地位にある女性はだからそのぶんプライドは強固なようだ。いいかえれば、そうでないとこの社会では女性は生き抜いていけないのである。これは韓国でベスト・セラーになった『イルボヌンオプタ』（日本はない）（その後日本で『悲しい日本人』として翻訳刊行されたが、2000年に入って作者の親友から盗作だと訴えられて敗訴が決定した。現在国会議員として反日

活動に邁進している)の内容とずいぶん矛盾することになるが、著者はそういう韓国社会のなかでステイタスを勝ち取った女性であるから逆にプライドが強固だと考えればすべてが納得できる。しかし、これも個人差があるだろうことも肝に銘じておかなくてはならない。

そしてこの国では食事はあまり一人ではしない。最初僕は気づかなかつたが、この一緒に食事をするというのは、韓国国民の習慣なのだそう。そうやって他者との親睦を図る。それはそれでいいと思うが、だがそこに不在した場合が問題となる。なぜ一緒に食事しないのか、嫌なのか、といったさまざまな憶測が流れることになる。韓国は現代の日本以上に共同体的社会である。経済の朴先生によれば、「韓国人は、日本人が勉強を家に持ち帰るのと違って研究室(家の外)で勉強するのが習慣になっているんです。勉強に疲れると人の部屋に来て長話をしたり、テニスに誘ったりして人のことはあまり考えないんですよ。一人では行動しないのが韓国人の特徴です」という。

個人主義というものが稀薄なような気がする。一人であれこれするのが好きな僕によくされる質問に、「一人で淋しくないですか?」というものがあるが、そこにすべてが集約されているかと思う。だから結婚は早いし、男女問わず学生は同性どうしでも腕を組んで歩いている。それはこうした事情によるものなのか。聞くところによるとこれは親しみを表す表現だそうだが、僕の考えでは、と同時に「わ

たしとあなたは友達なんだから淋しくないのよ」といった表現に思われる。

もちろん、それはそれでいいことだと思う。ただそれが問題になるのは、それを他者に強要した場合である。一種の共同体に同化しなかった場合、そこに排除の構造が生じる可能性をもつ。たぶん、現代の日本人には少々わかりにくい部分もあるかと思う。それが、韓国人は情に厚く、日本人は情に薄いという紋切り型の言説となつて語られ続けてきているのではないかと思う。「一人では淋しい」と感じる国民感情と、「一人でも淋しくなくなつた」と感じる国民感情との相違がそうした言説を神話化しているのだろう。これが民族性や国民性の相違によつて生じてきたものなのか、個人の近代化の相違によつて生じてきたものかは、この国の後一〇年後を見ないとわからない。ただいえるのは、韓国が住みやすい日本人もいるだろうし、日本が住みやすい韓国人もいるだろう、ということである。しかし、いまのところ大概の日本人にとって韓国は住みづらく、大概の韓国人も日本は住みづらいというに違いない。

六月十九日(月) 晴

夕、工学科の金先生より研究室に電話があり、食事に誘われた。メンバーはほかに、崔、張先生の計四人。金先生が「長沢先生、何を食べましょうか? 何か食べたいものがありますか? 日本料理がいいですか?」と聞くので、

「日本料理よりも韓国式がいいですね」と言うと、「そうで  
すか、それでは私に任せてもらえますか?」となにやら嬉  
しそうにいうので、「これはなにかあるな」と思ったら案の  
定、「え、いまから行くところはですねえ、なんと言った  
らいいか、その、あれなんですよ」とずいぶん言葉を濁し  
た言い方をする。後ろの座席で崔先生がくすくすと笑う。  
「その、ですねえ、いまから行くところは犬の料理なん  
です。嫌ですか? 嫌ならいいんですよ、他の料理にしまし  
ょう」。

ついにやって来た。韓国名物のあの犬肉である。話には  
聞いていたが、正直言つて僕には無縁の料理だと思つてい  
た。だがこれは断る手はないと思ひ、「一度食べてみたい  
と思つていたんです。それにしましょう」と僕がいうと、「そ  
うですか。やはり韓国に来たんですから、いろいろ食べ  
てみたいといけませんねえ」と金先生が嬉しそうにいう。  
すでに半ば決定事項なのだ。話を聞くと、僕と崔先生が初  
体験。張先生は三度目だそう。金先生は何度も来ている  
のだろう、注文の仕方が慣れていた。「胸がワクワクします」  
と崔先生がいう。「本当ですか?」と僕が聞くと、「韓国人  
でも初めてのときは緊張するんですよ」と笑いながらいう。  
「それから長沢先生、これは日語日文学科の先生たちには  
内緒ですよ。別に犬の肉を食べて悪くはないんですが、ま  
あ、その、なんといいんですか、犬を食べるのは  
韓国人の恥だと思つている人もいますから、あまり人には

言わないほうがいいと思うんですよ」と金先生が言いづら  
そうにいうので「わかつていますよ、とくに女性は嫌がっ  
ていますからね。でもこれは食文化ですから」「そうなん  
です。これも文化なんですから」と威勢良くいうのがおか  
しい。

犬の肉はすき焼きのような鍋料理である。そして口に入  
れると、実に美味しい。柔らかく、味が濃く、脂身もある  
がほど良い。「うまい!」と言うと、「そうですね、こん  
な美味しいものはめつたにないんですよ」と金先生。「で  
も、犬と知っていると頭に犬の姿が浮かんで食べづらいで  
すねえ」と崔先生。張先生は「私は三度目なんです、や  
はりためらいます」と片言の日本語と韓国語でいう。味は、  
新宿紀伊国屋書店近くにある「熊本桂花ラーメン」のター  
ロー麵(千円)に入っている極太のチャーシューを想像し  
てもらえれば正解。とにかくとてもうまいものである。肉  
をすべて食べ終わると、鍋の中に御飯を入れてさらに熱し  
てチャーハンのようにして鍋を空にする。鍋の中は見事に  
何も残らないのである。犬といつても、食用に養殖され  
たもので、大きさは子牛ほどもあるという。完全に養殖され  
ているのだから、それを聞いてなんとなく安心した。あた  
りまえだが、街から攫つてくるのではないのだ(実際は飼  
い犬もあるそうだ)。

犬の肉を食べたという一種の共犯意識からか、ずいぶ  
んと話が弾んだ。そして張先生が、「ナガサワセンセイハ、

ナツヤスミニ、ニホンへ、イツカエリマスカ？」と聞いてきた。すると横から二人が「うまい！　いまの日本語はうまかった、やればできるじゃないか」とからかいの掛け声が上がった。張先生は恥ずかしそうに頭をかいている。そして金先生がいう。「私が思うにはです、二人がお互いに言葉を教え合っていけばいいと思うんですよ。酒を飲みながらいいんですからね。それが外国人どうしとしていいことだと私は思うんですよ」

六月二十七日（火）曇後雨

午後三時、慶北大学の李涼煥氏に慶州旅行を招待されたので彼の住む大邱へ出掛ける。と思いきや、彼の電話番号がわからない。以前控えておいたのだが、そのメモを失くしてしまつたらしい。どこを探してもない。そこでちょうど昨夜電話がかかってきた知り合いの劉恩京女士に電話する。「番号案内に登録してあればわかると思うんだけど、なんとか探しましょう。三〇分後にもう一度かけ直してください」と言われて電話を切る。そして電話する。「わかつたわよ」との明るい返事。なんでも、御主人のネットワークで分かつたとか。狭い世界であるが、今回はこの狭さに助けられた。カムサハムミダ。

そして、わが家のシヌ・アパート前から二本のバスを乗り換えて亀浦駅まで行き、駅前の電話ボックスから大邱に電話を入れた。道に迷つたりしたのでここまですでに一

時間が経過していた。そういえば、僕はこの国に来て四カ月になるというのにまだ一度も公衆電話をかけたことがなかったのである。受話器が電話機の上に置かれていて料金が20を指している。ラッキー、このまま使えるぞ！　と思つて受話器を取つて番号を押したが通じない。なんなんだろう、不可解だ。よく見ると隣のボックスも受話器が機械の上に乗せてある。使用中の人がトイレに行つてまた戻つて来るのかしら。よくわからない。とにかくその20という数字を消してからコインを入れて電話をかけた。あとで公衆電話のシステムを彼から聞くことにしよう。駅前の電気屋のウインドウを覗くと、「ウォークマン」ならぬ「トークマン」があつて笑えた。語呂があつていてなかなか親しみがもてる。ソニーやパナソニックもあつたが、アイワ製品が多かつたようだ。値段は日本円と大差ないと思う。それでウォークマンをアパートに置いてきたことに気づいて、ウォークマンを持つてくれば良かったと思つたが仕方ない。

それにしても初めての汽車の旅である。釜山駅を観察したときもそうだったが、出発改札と到着改札が一階と二階に別れている。それを確認してから汽車票（切符）売り場で切符を購入。切符購入に際して間違つて行けないのは、大邱には「東大邱駅」と「大邱駅」が隣接していて、東大邱駅は新しい総合駅でセマウル号をはじめとする全車種が停車する。一方、大邱駅は旧駅だが、市の中心部はこの大

邱駅に集中してこの二駅が大邱の中心をなしているらしい。心の中で何度も言葉を暗唱して「大邱カチヂュセヨ」というと、すぐに外国人と知れて「ノーマル？」という言葉が窓口から返ってきた。「ノーマル？」なにか座席に種類があるのだろうか？ よくわからないが「イエス」と答えて切符を買った。切符には時間と座席番号が記されており、指定席となっている。料金は3500ウォンだから割る9にして390円だ。安い！とはいえ、僕は円で給料をもらっているわけではないので、この国の感覚としては二倍か三倍にしなくてはならない。千円前後だ。でも安い。後で李氏に聞くと、汽車の種類は超特急のセマウル号と特急の木樅号、急行の統一号そして鈍行があるという。セマウルと木樅・統一は全車両が指定席で指定席がなくなると次の列車になるそうだ。しかも列車案内表示を見るとこの木樅と統一は本数が多いので利用しやすい。JRのように詰め込み式ではないので、急がない旅行者にはこのうえもなくうれしいシステムだ。

その木樅号に乗って四時二十七分亀浦駅を僕は発った。座席は七号車の六十九番、進行方向右座席の通路側である。窓側の隣は若い女性が座っている。車内の座席は七分くらい埋まっていた。時差はないとはいえ、実質的には韓国は東京と一時間かそれ以上の時差があるようで、四時半という時間はまだ明るい。汚染によって死の河となっているとは聞かされていたが、雄大な流れの落東河を左にして汽車

は北上した。震動と揺れが少ないため車内は静かで冷房も気持ちいい。隣の女性は寒さに震えながらもサングラスをして大型のヘッドフォンカセットを聴いて寝たふりをしてる。右車窓からは青々と茂った松や落葉樹に覆われた岩山が続く。竹林もあった。韓国に来てはじめて見る竹である。鄙びた駅あり、そうでもない駅ありでいろいろと車窓を眺めていて飽きることがない。高層アパートが見えてくるとそこが停車駅だ。密陽・慶山を通り、そして東大邱駅の次に大邱駅着五時四十分着の定刻通りだ。時間は正確である。

改札を出るとすぐに「長沢さん」と声を掛けられた。懐かしいあの大きな顔と大きな声である。少々頭髪が寂しくなったか。「いや、懐かしいですね。長沢さんは相変わらず若いですねえ、わたしなんか、ほら、髪が禿げてきましたよ」といつて薄くなった前髪を撫でて僕に見せてくれる。「とにかく、食事をしてからこの大邱を案内しますよ」といわれて小雨のばらつく大邱繁華街の人込みを僕は歩いた。平日だというのにこの人混みはなんだといったくなるほどにとにかく人が多い。土日の渋谷バルコ通りの幅を広くした感じを思い浮かべてくれればそれが正解。そして建物は全体がセピア色の雰囲気想像してもらえばいい。写真で見た昭和初年代の銀座のような風景だ。

この大邱は慶尚北道の人口二百万、国内線空港もある韓国第三の都市である。とはいえ地方都市であるには変わり



ない。釜山にしてもそうだが、大都市といわれるわりにはその都市の景観はごみごみとした地方都市の様相である。統一された近代的な景観というものにはほど遠い。だがそのぶん人の熱気というものが物凄い。大邱駅のメインストリートは駅から真直に伸びていて、その両側にさまざまなお店や飲食店そして映画館が並んでいる。百貨店に入った。最後に会ったのが五年前だろうか？ まるでそれまでの空白時間がなかったかのように僕らは身体を密着させて歩いた。百貨店（デパートとはいわない）の食堂でビビンバップを食べてから市内を散策し、中華料理屋で海産料理と75度の焼酎を飲んだ。滅法強いが「焼酎は後が残らないから明日は大丈夫」と言われて二人で一本空けた。料理は大皿にてんこ盛りで、二人でもとても食べ切れない。「これ、何人分なの？」と聞くと、「一つと注文したんですよ」という。

飲みながら、彼の留学時代に僕の部屋で酒を飲んだり歌を唄ったりした思い出話に花が咲いた。僕は70%忘れかけていたのだが、彼は詳細に覚えていてくれた。「韓国ではサイモン&ガーファングルがとても人気がありましたね、歌を聞くといつも長沢さんのギターを思い出すんですよ。後でカセット・テープをプレゼントしますよ、韓国には持って来ないでしょ」と言ってくれる。そして自分の辛かった留学時代と博士の学位を取るための苦労話。文学で博士の学位を取得したのは中央大学創立以来彼が四人

目。後で学位認定証を見たが、「第四号」と印が押してあった。もちろん日本文学では彼が第一号。なにぶん初めてのことなのでいろいろ大変だったようだ。基本的に日本の大学システムでは博士学位は出さないことになっているからだ。とにかく快挙である。彼によってどれほどの留学生が勇気づけられたか。不可能と思われた学位を中央大学が出したからである。とはいえ、自分も含めて日本人には無縁な代物。

そして僕の記憶では、かれは確か留学中のときは釜山大学助教授だったと思う。だから他の留学生たちとは孤立していたと記憶している。だって、相手が助教授だったらなにかと打ち解けた友人関係にはなれないはずだし、互いに気を遣うはずだ。いつも学生研究室でなにやら一人ごそそやっていたと記憶している。いまは国立慶北大学の教授。歴代大統領が出た名門大学だと聞いている。とにかく、積もる話一杯でいくら話しても足りないもので、焼酎が空いたのを潮に彼のデパートに戻ることにした。

雨足は激しく、僕が用意周到に持ってきた韓国製折り畳み傘が威力を放った。これは、なんと折り畳みの自動である。しかも大きい。韓国に来て感動したのがこの傘である。職場の教員たちにこの素晴らしさを説いて回ると、日本製のほうが軽くていい、というのでその都度論争することになっていた。「病人以外ならこれほど便利なものはない。日本製は軽いぶん壊れやすい」と。すると「韓国製はもつと壊れ

やすい」との反論がすかさず帰ってきたが、だったら便利さを取れば自動の韓国製がいいと思うのだ。

アパートは駅から20分くらいか？「大学へはどう通っているの？」と聞くと、バスを二本乗り継いで通っているという。運転免許はあるが運転は出来ないのだ。車王国韓国で、しかも顔と体格は野生動物のようなのに意外な面を発見した。

アパートに着くまでに大きな交差点があるが、信号が青になっても渡ってはいけないと、青ださあ渡ろう、とした僕の腕を強く掴んだ。案の定信号が赤でも車は無視してやってきた。ついつい僕はその習慣を忘れていた。大邸はそうでないだろうとたかをくくっていたからだ。なかなか渡れない。やっとなと思いきや、今度は横断歩道の上を2500CCレベルのバイクが走ってくる。おいおい、そこまではルール違反だぜ、と二人で笑う。たぶん、バイクも車が怖いのだ。

アパートに着いて奥さんに挨拶。アパートとはいえ広い家だ。日本でこの広さのマンションだったらまず家賃二〇万、いや三〇万はするだろうか。すぐ家賃を考えてしまふところはどうも貧乏性である。余談だが体格は夫婦似るものだというのを確信した。そして高校一年生の男子と小学校の女の子。下の子は恥ずかしがって出てこない。上の子は日本語がネイティブだそう。韓国語で挨拶すると「はじめまして、李くです」とうまい日本語が返ってきた。

中学まで日本の学校に通っていたという。部屋には手塚治虫の漫画が山積みされ、『火の鳥』全巻があの大判サイズであった。「漫画を読む速さは私なんかより息子のほうが速いんです」と。そして「手塚治虫は素晴らしい人ですねえ。私はいま大学院の授業で手塚治虫を教材にも使っていますよ」という。

「長沢さん、『ブツダ』ってご存じですか？ あれは本当に素晴らしいんです。ここに全巻ありますから、まだ読んでないんだったら是非持って行ってください。そして今度感想を聞かせてください」ということになった。全十四巻である。重いことこの上ないが、僕も以前から読みたかったので借りて行くことにした。なんか常識からして立場が逆のような気がしたが、まあ、いいか。

日本でもそうだったが、どうも人の家というものは落ち着かない。僕が立っていると、「座って下さい」というのだが、腰が落ち着かない。それを伝えると、「じゃあ私の書斎に来ますか」ということで彼の部屋に移動した。書斎とはいっても書籍はほとんど研究室にあるのだからそれほど多くはない。棚をゴソゴソして「感熱紙持って行きますか？」と親切にいわれるが、おいおい、それって貴重なんだから自分も使うでしょ。駄目だよ人にあげちゃあ、と断る。それから自分の宝物だといって、学位を取るために通信した指導教授たちからの葉書、手紙を見せてくれた。筑波大学時代の恩師からの高名な国文学者の手紙も

多くある（平川先生だったかな）。もちろん、安川定男先生や塚本康彦先生からの手紙もどっさりとおある。そして手紙はすべてワープロに入れておいたのだと。それだけでなく、手紙の一つ一つに自分のコメントも加えて大切に保存している。実にマメである。「いや、こういったものは塚本先生の影響もあるんでしょねえ。いずれこれを本にしたいと思ってるんです」という。

床がずいぶん奇麗だ。僕の部屋はすぐに汚れてしまう。オンドル形式というのはいくらに床が汚れてしまうというのが僕のこれまでの持論だが、そのことを奥さんに聞いてみた。「床がずいぶん奇麗ですけど掃除はどのくらいの間隔でやっているんですか？ 僕の部屋はすぐ汚れてしまうんです」と。すると、「一日二回毎日ヤッテイマス」とまだ慣れぬ日本語で答えてくれた。一日二回も！ 僕は悪しき呪文のようにそれを何度も反芻した。僕はせいぜい二週間に一度やればいいほうだ。もしかしたら、韓国女性はこの一日二回の床掃除のために家庭に縛られているのではないかと思ってしまう。「道具を使っていますか？ それとも手で……」。「ええ、雑巾で拭いています」とのこと。やっぱりオンドルの床掃除は雑巾が一番いいんだ、と僕の掃除法の確実性を確信した。「家が広いんですけど、結構時間がかかるでしょう？ 李さんも掃除を手伝ってくれるんですか？」。なにかいろいろ質問しているなあ、とは思いつつ、やはりこの床掃除は気になるのだ。すかさず横から「私も

よく手伝っているんですよ」と李さんが慌てていうと「イエヒトリデス」とのこと。マズイ、深入りしてしまった。そしてスイカと日本茶を交互に口に入れながらいろいろ話したが、もう午前一時。風呂に入って床についた。僕は慶州の案内書を読みながらそのまま寝てしまった。

六月二十八日（水）昼後晴

八時に起床すると、奥さんが運転をするので子供の面倒は奥さんの妹さんに見てもらおうということで、その妹さんが来ていた。なにか物凄く人手を煩わしてしまった気がして恐縮だ。韓式朝食を食べて出発。車が立派だ。「この車はいいですねえ」とまた貧乏人の発言。「この車は塚本先生がこちらの大学で講演していただいたときに、それに合わせて買ったんですよ。私は運転できませんから、妻のものですよ」。

高速道路のインターが近いので慶州までは一時間ほど。田や畑が多い穏やかな風景の中を車は駆けていく。平均時速110キロといったところか。インターチェンジを出るといよいよ新羅千年王国の文化を残す慶州だ。国際的観光都市として国を挙げて整備している都市とあって、さすがに道はよく整備され、乱暴な運転も見当たらない。車の数も多くない。平日だからだと李さんは言う。休日は大変ですよ、と李さん。塚本先生をはじめ、さまざま日本人をここ慶州に案内してきたという。「今日は車ですから、車

でないとい回れないところを最初行きましよう」と南山地域を重点に回ることになった。まず、車を降りて山麓の松林を抜け、誰の墓かはわからないが、山のようにこんもりと盛り上がった古墳が多い。

「韓国では王朝が変わると前の王朝を否定するために記録を破棄してしまってきたんです。だからこの墓も誰のものかわからなくて、わかっている墓はごく数名だけなんです。ねえ」と息を荒くして説明してくれる。途中、リスがいたので記念撮影。リスは韓国でもリスだそう。リス、リスと言いながら李さんは一人はしゃいでいた。「おおい、こつちだぞ、出てこいよ」と。ここは拝観料無し。自然のまんまだ。

次はガイドブックで著名な鮑石亭で拝観料330ウォン。駐車代が500ウォンだからこつちの方が高い。新羅時代の王が遊んだという池のようなものがあるだけだから、これから慶州に向かう人は、ここはパスして時間を節約しよう。見て終わり。そして次は有名な石窟庵。ここは車がないと行くまでが大変だ。京都は比叡山に行くような奥深い山を開いたドライブ・ウェイを走って数十分。景色がいい。冬なら対馬が見えるという。右左のコーナリングは見えて楽しい。山頂には広い駐車場があり、ここは無料。さっきの鮑石亭は詐欺みたいなものだから日本の観光地と同じ。そして入り口での表示は拝観料1700ウォン。僕が払おうとしても李さんが僕には出させない。どうも今

回は徹底的におんぶにだつこになりそう。奥さんは何度も見ているらしく、この石窟庵はパスして車で一休みらしい。その理由が分かった。入り口から一キロほど歩かなくてはならない。ここは山の中（山中という意味ではなく、文字通りの山をくり抜いて巨大な空洞にしてあるのだ）に掘られ、柔和な顔をした巨大な釈迦如来座像と、それを守る十一面観音像などが幾体も守護神となって壁に掘られてある。発見者は郵便配達人で、発見時代は日帝時代だそう。李さんは溜め息をつきながら言う。「この仏像がこうして残っているのは、日帝時代に発見されたからです。もし李氏朝鮮時代でしたらことごとく破壊されていたでしょう。皮肉な歴史です」と。

このへんの事情を知らない読者のために僕なりに少々解説をしておこう。高麗王朝が千年王国新羅王朝を滅ぼしたのが935年、以後高麗王朝は豊臣軍を打ち破った李將軍が内部クーテーターを1392年に起こして李朝鮮王朝を築くまで仏教文化とともに栄えた。しかし、栄えるというのは一方で腐敗の謂でもある。この国でもそれは例外ではなく、李朝鮮王朝までの永きの間、仏教は国教であったために僧侶たちはひどく腐敗した。それで李將軍は僧侶を追放し、さらには仏閣仏像に至るまでをことごとく破壊しつくした。日本でいえばちょうど明治時代の廃仏毀釈を考えればいい。そしてそれをおよそ百倍の規模にすればいいのだ。それだけ徹底的にやった、ということである。仏教は

廃棄され、変わって儒教がこの国の国教となったのである。この規模の壮大さはやはり大陸的、とくに中国的だと僕は思う。中国でも新しく国が興ると、前代の国は完膚なきまでに否定されるべくすべてが焼き払われる。「焚書」というやつだがもちろん対象は書物だけではない。だから中国では歴史的遺物や書物はさほど残らない。

それと同じことが中国を模範としてきた朝鮮半島にも起こった。そして追われた僧侶は賤民となつて朽ち果てるか逃げ場を求めて日本に渡来するしかなかった。このとき、さまざまな人物や文物が日本に密輸入された。それを持つて、僧侶らは身の安全を図つたのだろう。隣国のお家事情が日本に予期せぬ文化の成熟した実をもたらしたというわけである。

日本の純伝統文化と信じられている茶道も、このようにして京都五山に身を寄せた村田珠光を開祖に始まつた。室町文化とはこのようにして出来上がったのであるが、もちろん高校日本史の教科書には書かれていない。すべてが自然発生的な日本の伝統文化だと語られている。室町文化はどこまでが朝鮮文化でどこまでが日本文化かを見抜くのは難しい。

そして李さんは、残された文化財の少なさを嘆くように「日本は文化遺跡が非常に多くて、記録も残っているのは素晴らしいことですねえ。韓国と違って、やはり天皇がいるからでしょうねえ。天皇の家系を誰も滅ぼさなかったと

いうのはすごいことです」という。これはものすごく難しい問題だが、そういう言い方はたんに戦争遺族会を喜ばせるか、右翼や保守政治家・学者を喜ばせるに十分である。しかし李さんの感想はどういうわけか、少なくとも留学生たちからも聞いたことのある言葉だ。

「歴史的にいつて天皇は嫌いだけど、しかし文化財が残っているのは天皇の存在による。天皇家を滅ぼしてこなかった歴史の知というのはいすごい」と。だがそうだろうか。別段天皇の存在によつて文化財が護られたのではなくて、日本では中国のような大陸的要素がなかったのと、近代に入るまでは中国が他国から侵略された経験がなかったからではないだろうか、なども考えてみる。しかし、外から見た洞察というのは内側では明らかでなかった視点をもたらしてくれる。いまの僕が韓国を見つめているように、留学生たちもまた日本を見つめていたのだ。だから彼らにはよく見えていたのかもしれない。

この国では朝鮮時代に仏教は滅んだ。後で慶州国立博物館に行ったが、首を折られた仏像がいくつも並び、当時の凄絶さを物語っている。無残なものだ。さきほど行った南山には首の無い仏像がいまでもゴロゴロしているという。「今日は無理ですが次回はその山に行つてみましょう」と李さん。だから、もし朝鮮王朝時代にこの石窟庵が発見されていたら、それこそこの世界的財産が破壊されていたわけである。それを日帝が保護したというのだから皮肉とい

えば皮肉である（もつとも手厚く保護したかどうかはわからないが、ただ破壊しなかったことだけは確かなようだ。ここにあるから）。李さんがいうには、当時の総督が（寺内？）がこれほどの美術品を作った朝鮮民族を植民地化してはいけないとして反対した、といったというが、これは眉唾ものでたぶん日本人が作った作り話ではないかと思う。

石箱庵を下って山の麓にあるのがまたまたガイドブックで有名な仏国寺。これは僕も日本で聞いたことがあるが、たぶん渡韓に際して購入したこの『地球の歩き方』に書かれてあったものだろう。さきほどの石箱庵にしてもこの仏国寺にしても、このシャープの書院ワープロでは一発変換で出てくるのでやはり国際的な名所なんだろうとあらためて実感。拝観するまえに門前町にある食堂で韓式定食を食べる。奥さんも徐々に日本語を思い出してきたらしく、よく喋るようになった。「だんだん日本語を思い出してきました」といつてくれる。そして、食べながら奥さんがいうには、「日本に行く前は日本人は恐ろしい人間だということとを教えられていたので、怖くてずっと部屋に閉じこもっていました」と。「ずっと日本人が怖かったんですか？」と聞くと、「八王子に引越してから地域の合唱団に入っ、日本人の友達がたくさん出来ました」という。韓国での学生時代には合唱団に入っていたそうだ。怖い日本人ばかりでなくてよかったと僕としては一安心。

そして仏国寺だが、話が長くなるので割愛。知りたい人は行つてください。ここでは日本人の団体客が来ていた。僕たちは団体客を尻目に「チーズ」の笑顔で記念写真をパン撮った。そして夕方は河豚の韓国式鍋料理。韓国では河豚鍋は一般的な食べ物で、僕はこの国に来てよく河豚を食べた。日本の河豚料理の高さは異常である。僕の住む街でも河豚料理屋はいたるところにある。そして李夫妻と別れを惜しんで僕は一人で慶州バスターミナルを釜山に向けて七時四十分に出発した。八時四十分釜山着。例によって道に迷い、アパート午後十一時着の後すぐ李氏の大邱にお礼の電話を入れた。とても楽しい大邱・慶州の旅だった。

☆

1995年6月の思い出深い日記である。19年前に書いた日誌をいま読み返してみると、慰安婦問題や歴史問題に軋轢をきたしている現在の嫌韓や反日の要因をあらためて見直してみようという思いになる。日本人と韓国人はあきらかに異なる面を注視したとしても、それ以上に心性において通い合うところが多い。これを両国の政治のために無為となすのはきわめて国家的な損失だと痛切に思う。そして、今回のセウォル号沈没事故を契機として、いま韓国人が描こうとしている将来像はまぎれもなく将来の日韓関係にまで自ら影響を及ぼすものである。それがどのような将来像を描こうとしているのか、韓国のメディアを中心に見ていきたい。